

私のアメリカ留学回想

森 山 清 徹

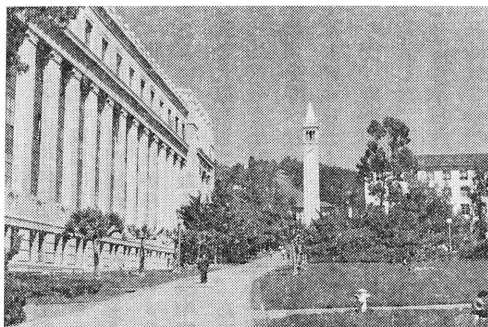
私は、アメリカの政治経済とか、社会、文化、歴史を専攻する者ではない。つまりアメリカそれ自体を研究対象とする者ではないから、アメリカを理解する新たな視点や方法を、ここで提供出来る者ではない。また見聞記やアメリカ紹介というハウトゥものは、山ほどあり、また私のよく成し得るところではない。私の専攻はインド仏教思想史である。多少なりとも、私にユニークな点があり得るとすれば、それは、日本とアメリカ、日本とインドという二極関係ではなく、日本、インド、アメリカという三極関係の上から、インド仏教の視点に基づき、アメリカで、そして今、考えたことのみである。

研究上のごとは、すでに佛大の研究紀要や、人文学論集、大学院紀要等に発表したもので、ここで、そのことに触れようとは思わない。

フットボールのカリフォルニア大(U.C.B.)とスタンフォード大学とのあの宿命の対決——そのフィーバーぶりは、昨年の阪神ファイバーと負けず劣らずであること、東海岸、ボストン、ニューヨーク、ワシントンの都市や大学を訪れたこと、デスヴァレーやヨセミテの大自然の雄大さ、家族とロスアンゼルス、サンディエゴ、サンフランシスコを旅したこと、また心に残る人々との出会いや私の生活を綴った日記等、それらを事細かに再現するスペースは、今はない。これらの大部分は割愛し、アメリカへの出発前後と帰国前後、については書いたことがないので、ここに二、三記述し、中味二年間のことは、その々考えたこと（仏教学とアメリカ）の中に統合しようと思う。

カリフォルニアからの通信

バークレーから帰って、二年数ヶ月になる



カルフォルニア大学・バークレー校

(当地にいた期間より少し長くなった)。その間、当時のことを思い出さない日はないし、逆にむこうにいた時は、日本のこと、家族のことを想わない日はなかった。しかし、アメリカでのことが、全て、記憶の中だけにあってではない。時たま、カリフォルニアからの「メッセージ」がやってくる。最近では、当地で得た運転免許が期限切れとなるので更新するようにとのもの。10ドル(¥1600円)を送れば以降四年間有効となる。但し、その送金小切手を銀行で作成してもらいう手数料の方が高くつく(金融機関というのは、そういうイメージが私には強い。何事も、イメージで判断してはよくないのであるが)。いま、免許の更新手続をするのは、公的なものでも、一つや二つ、アメリカとの絆を残しておきたいとの気持と、再度、渡米した時の為でもある。三ヶ月以上滞在する者にとって、当地の法律では、日本で得てきた国際免許では具合が悪いというので取得したのであるが、あれからもう四年にもなる。因みに、もちろん、むこうには自動車学校というようなものはない。試験の時も、自分の車で受験するのである。免許のある人が、一人横についていれば、道路で自分で練習する。そ

して取得の為の経費は、全てで10ドルのみ。こういった事柄は、御承知の如く、日本の通念とは、全く違う。車に対する考え方の違いもあろうし、事情も異なる。日本で(そして又、自分にとって)常識となっていることが、どこへ行ってもそうでないという実例は、他にもいくつでもある。ものの考え方から、生活の仕方まで。このことを実感していることも海外で学ぶことのひとつと言える。つまり、観念と、個々の具体的な実際との違いは、環境を異にし、異文化と直面すると一層顕著になってくる。

出発前後そしてインターナショナルハウスでのこと

一九八二年春から八四年春まで、私は二年間、アメリカ、カリフォルニア大学、バークレー校に研究員として訪れた。正式の立場はVisiting Scholar といひ、義務は研究及びその報告・発表だけという恵まれたものである。留学費用は浄土宗から、賜わったが、その費用は、結局のところ一年半程で底を突き、あとは自腹を切ることになった。当地にいる時も、比較的慎ましい生活をしてきた。贅沢を慎むことも、自然と身に付いたことの一つである(それは経済的な理由というより

は、むしろ「私は、今、何の為にアメリカにいくのか」ということを反芻しながら生きていたからである)。それより以前、ハワイへ浄土宗開教区を訪ねたことはあったが、アメリカ本土は初めてであった。

出発前の夏、母が手術を受け、二ヶ月間入院した。病床で母は、私がアメリカへ行くことを最も喜んでくれたのである。母の術後のことが、気懸かりなまま、出発の日を迎えた。そしてまた、出発直前、荷作りの最中、私自身、おたふく風にかかった。おかげでMUMPS という言葉を、その時、覚えた。大阪空港からの出発の日、仏教学科の先生方、それに私の家族に見送ってもらった(例の風邪で顔は、まだ腫れていた)。それでも、まだ、出発してこれから一人、アメリカで生活するという実感はなく、逆に機中では、あれこれ考え興奮していたせいか、あまり眠れなかった。そんな寝不足の状態で、サンフランシスコ空港へ着いた。着陸前の機内に、ニューヨークセレナーデが響いていた。

その後、無事到着したことを日本にいる家族に電話した。当時、まだ三歳半であった次女は、おとうさん、どこにいるの? と言った。それが、今の(その時の)家族と私の

全てを物語っているようであった。そして妻は、電話のむこうで、泣いているように思えた。こうして、私のアメリカ上陸は、いよいよ始まったのである。

アメリカは、面積にして日本の約25倍（人口では2倍）アラスカの分を除けば、それほどではないにしても、西海岸・東海岸では三時間の時差があり、ニューヨークからは、サンフランシスコへも、ロンドンへも共に飛行機で五時間である。カリフォルニアは、日本と同じくらいの広さである。したがって一口に、アメリカといっても、住む所によってかなり印象が変わることだろう。私のいたバークレーは、大学の町、学生の町であるから、一般の市街地とも、さらには中西部の農村地帯や北部、南部とも相当異なるであろう。アメリカ人にとってさえ、東部の人には、西部は自由奔放な所と映るし、西部の人にとって東部は、せつがちで窮屈な、フォーマルな要素の多い所と映る。また接するアメリカ人によっても随分違う、アジア諸国、文化に関心を持つ人とは、話題も共通しやすいし、メンタリティーの面でも共感しあえるものが多いように思える。

私の住居は、インターナショナル（I^NT^ER）ハ

ウスと呼ばれ、世界60ヶ国からの留学生や研究員を含む男・女600人が住む寮であった。そこからは、対岸にサンフランシスコ、ゴールデンゲートブリッジが一望でき、風光明媚な地である。アメリカには一〇〇種以上の人種が共存しているが、その寮も、まさしく「人種のるつぼ（melting pot）」であった。そこにいる二年間に、国家間の種々の事件が発生した。イギリスとアルゼンチンとのフォークランド紛争、米国のグラナダ（進攻が侵略か決し難いが）問題、日本の歴史教科書の記述を巡る中国・韓国からの記述訂正要求、何といっても一番のショックは、ソビエトの戦闘機による韓国旅客機の撃墜、いかに領空侵犯とはいえ、民間機を、西側諸国ならば、撃墜するだろうか、論議を何度かやった。これら諸事件の当事国の人達が、寮内に身近にいた。それらは、決して遠い外国での出来事ではなかったのである。

またその住居を中心として多くの親友を得た。ドクター論文を出したらアラスカへ行くと言っていたコンピュータと図書館学専攻のポール、いま、ハーバード大の医学部にいるテッド、よく私の発音を正してくれたアグネス、日本のことをよく質問してきたマリー、

韓国から来ていた秀才であり、かつ立派な人柄のキムさん、テッドとアグネスには京都で再会した。また私の英語で書いた論文を推薦してくれた、ケン、イーストマン、カレンそしてマーク、彼とは今でも四条センターで互いに講師として出会っている。彼らの友情が、私のアメリカ生活をそして今を豊かにしてくれたことは間違いない。

それにナバ・ヴァレー産のワインに、バッドワイザーも。夜11時CBSニュースをみながら、それを味わい、私の日課は終るのである。

仏教学とアメリカ、そして英語のこと（一）
なぜ、インド仏教学を専攻する者が、アメリカへ行くのか、という質問を受けることがある。もともと、門外漢の人からであることが多いが、他の学問を専攻する学者でも、その問いをぶつけてくることもある。そう聞いたとき専攻が異なれば、学者も素人ばいことを言う人がいるものだと思った。（学者というのは、何でも一通り知っているような顔をしているところが、難点といえは難点である）さらには、インド仏教だったら、インドへ行くべき、とでも言いたげな意見を押し付けて来る他分野の学者に、当地で出会ったこ

とがあるが、その人は固定観念でものを見ていると思った。だからその人の話は、他の事柄や、自分の学問について語る場合についても、あまり信用を置けなかった(こういうことも、逆に私の固定観念になる恐れがあるが)。なぜなら、先入観や想像でものを見、語ることは、少くとも学問をする姿勢とは逆行するからである。

インド仏教の風土というようなのは、確かにアメリカにはない。しかし、どうだろうか。インド仏教の優れた学者が、そしてその人に師事したいと思う学者がアメリカにいたなら(もともと、インド仏教のみならず、日本仏教やチベット仏教、密教も研究は盛んである)、だから私は、インド人アビダルマ学者 P・S・ジャイニ教授と般若経学者ランキヤスター教授を訪ねたのであるが、そして膨大な量の英語で書かれた仏教の研究書・論文があるという事実を知ったなら、また英語で論文を書くようにするならそこへ行くことに、先のような疑問は起ってこないであろう。その実状を知らないから、そう思うだけのことである。その上、英語をものにするチャンスが同時に伴うなら、アメリカを留学先に選ぶことには意義があるし、何よりも、当の本人

である私が、今、アメリカへ行つて良かったと思つてゐる。そう思ふことの一つに、私は、予てから、仏教學を英語で語ることが出来なければならぬと思つてゐた。無論、アメリカへ行く前からである。実際、外国の人、アメリカ人に限つてみても、仏教に関心のある人に何人も出会つてゐたし、そしてその都度、彼らの要求に応え得るだけの英語力と、自分の仏教學が出来上がつていないことを痛感してゐたからである。日本語で少々説明が出来ても、英語で表現出来なければ、その知識を要求しているその外国人の前では、こちらは、何も知らないのとあまり変わらなからである。だから、アメリカへ行つたら、英語力を身に付け、自分の仏教學を確立すべくがんばらうと思つてゐた。そのつもりで、アメリカでの二年間を過ごしてきた。私にとって、アメリカを知ることとは、まさしく英語を理解することであつた。なぜなら、アメリカ人の生活や文化や風土は、それに集約されると考へてゐた。言葉がわからなければ、文化や風土は、なおさらわかるわけがない(と、当時の私は、力んでいた)。

よく、外国にゐると、その国の言葉が自然に上手になると思つてゐる人がゐるが、それ

は大変な誤解である。それ相当の努力をしないことには決して身に付くものではない。ただ子供の場合は別である。彼らは遊びを通じて仲間をつくり、体で感覚的に言葉を覚えて行く。それに比べ成人は、一般に、子供のもつその柔軟性を欠く、その点は、努力と種々の知識量で補うのである。その努力を本気で行つたものだけが、言葉は意思疎通の媒介物であることを知り、より重要なことは、その都度、必要となる正確な知識こそであり、さらに重要なことは、人格であるということ、人と人との出会いを通じて知るのである。

また、英語を必要とする場面で刺激となつたことに次のようなこともあつた。アメリカで日本人の様々な分野の学者に出会つたが、学問の専攻が異なると、その学者が、どういった姿勢で学問と取り組んでいるのか、知る術もないことがある。自分の領域のことを話せば、それで飯を食つてゐるものは、多少詳しくに決つてゐるからである。そのとき、英語力が、一つのパロメーターになることがある。だから私は、経済やビジネス、政治、法律、建築、土木工学等を専攻する人に、英語でも負けるわけにはいかなかった。そう思つてやつてきたのである。そうやつてきたこと

が、今、助けとなっていることがある。それは、この四月から開設された四条センターでの、英語による仏教国際講座^①でのことである。英語で仏教を講義するものであるが、私は、それを外国人への、あるいは英語で聴くことを希望している、日本人への広い意味での教化布教活動であると考えている。また、啓蒙活動の一つとしても多様な需要に応える必要がある。

講座開催の当日のみならず、その準備には時間と労力を要する。日本人からは、それ程、鋭い質問を受けたことがないと思えるような核心をついた問いが、話の途中でも入ってくる。説明をし、相手が納得してくれた時はいいが、時にあまり納得を得られないと、説明がまずかったのかと、後々の反省材料にする。とにかく、やりがいはあるが、講義前日のプレッシャーは、かなりである。こんなことを引き受けるべきではなかったと毎回のように、その前夜思えてくる。しかし、英語で仏教を語るこの上達は、このプレッシャーを何度経験し、その苦しみを何度味わったかによる。そういった実際の場での経験からしか、感覚はつかめてこない。観客席から、いくら立派な評論や意見を述べても、それは

実践力や即戦力にはつながらないのと同じである。外国で生活する場合は、言葉に限らず、特に実践力こそがものをいう。だから何事につけ実際にやった経験を通じての意見しか私は参考にしないことにしている。観念的な意見など、ほとんど何の役にも立たないからである。そういう習慣が身に付いた。

また、外国の学者と研究上の交流を深めたいなら、論文は英語で書く必要がある。この技術を身に付けることも、アメリカへ行つた目的の一つである。言うまでもなく、理工系の学問では、早くから英語で論文を書くことは常識となっている。最近では、落語も英語でやるところまで来ている。

仏教学とアメリカ(Ⅱ)

パークレーで、日本語学の権威である筑波大のK教授に出会った。私が仏教学を専攻する旨を伝えと、K先生は、言語学者としての視点から、次のように言われた。〃かつて異国の地へ外国語をもたらすに偉大な貢献したのは、宣教師の布教活動であり、彼らの中からは比較言語学者さえ出た。宣教師は、その土地の言葉に通じないと布教活動は出来ない。今のうちに、異国の地の事情などわからず、言葉も、自国にいながら学べるような

状況にない時に、である。彼らは、辞書さえ、自らの手で作つたのである。命がけで、彼らをしてそうさせたものは何であつたのか。言うまでもなく、自己の宗教への深い信仰心からほとばしり出た、この確たるものを伝えたいという情熱が、彼らを動かし、命をものかせたのである(法顯・玄奘・義浄そしてザビエルさらには迫害さえ彼つた師達のことが想われる)。いかなる語学も、それに習熟するには、まず、なぜやるのか、という動機の堅固さが、その後の言葉の習熟度に大いに影響する。求法僧やミッショナリーの信仰からほとばしり出た動機以上の、動機は、考えつかない。その彼らの信仰とその土地の言葉を深く身に付け、啓蒙活動を展開しようとする情熱と意欲、それだけのものが私にあるかどうか、何度か自問した。今、四条センターでの国際講座を引き受けるのは、遠く及ぶものではないが、かつてのミッショナリーの布教活動の真似事にでもなればと思つてのことである。

異国の地で、それも仏教的風土から、より距離のあるところで生活すると、かえって仏教がよくわかるという思いをしたことが、何度かある。仏教の一つには、自己の心理・行

動(業・識)とこの世界の真相(緣起・無常・無我)を実践を通じ觀察し、それを實際の場に生かして行くことにあろう。それには、まず自己を内觀することが必要となる。したがって、生活環境を異にし、異文化と直面することによって、我々の懐いてゐる先入觀・偏見・常識と思い込んでいた事柄の矛盾点が浮き彫りにされ、自己の考え方の内省を促される機会を多く得る。すなわち、自己の物差しこそ普遍性のあるものという思い込みを反省する何よりのチャンスとなる。そして究極的には、先入觀の枠組から自由になること、つまり、仏教が、正見とか、智慧とか、解脱とかを教えるのの一つには、そこにあろう。

また、この世界は、自己が認識した限りのもの(vijñāpitrā・唯識)という考え方が、仏教にはあるが、それは、我々が、この生を受けて以来、実はもっと以前から、様々な経験をへて、心に薰じ付けてきたものが、性質や人格を形成してゐるのであり、このことを離れて、この世界を経験することは出来ない、というものである。つまり自己の認識・識別能力・判断(vijñāna・識)こそが全てであり、我々は、それ以上に以下にも、事物を認識するのではないということであ

る。ただ、努力やくり返し行う體驗的学習(修習)によって「識」の機能は向上し得る。眠らせておけば退行するし、発達はない。そこに努力(精進)の意義が存在する。この「唯識」の考え方は、異国の地・環境の異なる所に身をおけば、よく理解されて来るように思われる。例えば、英語を聴く場合、聴覚器官(耳)——対象としての発音(声)——主觀の側の意味を聴き分ける能力(耳識)——の三者が統合的に作用して、聴聞し理解するという認識が成立する。聴き分け、その内容を知る経験や能力が不足していると、いくら聴覚器官が健全に働き、発声音が聴くに十分であったとしても、それは、ただの音にしか過ぎず、何を意味しているのか理解はゆかない。その場合、コミュニケーションを十分に成立させることは困難となる。「識」とは、意味を理解する、知り分けることである。

しかし、コンピュータが、聞き取った外国語を日本語にあるいはその逆に翻訳してくれるかも知れない。だが、データバンクから与えられた事柄を、最終的にどう処理・判断するかは、やはり、自分の識別の問題である。この意味で「識」とは、さらに、機械がなし得る対象と概念との対応より進んで、自己の

認識・判断にまで及ぶ。結局、意味をどれ程、理解し得るかは、自己の識別能力・判断(識)にかかっている。このことが一つには、すべては各個人のもつ識別能力のみ(三界唯心)と究極的に言われる所以である。いま、言葉に関する(聴覚の)例を挙げたが、視覚にしても、味覚にしても感性の全て(六識)について、このことは当てはまる。こういったことの奥行きは、特にホモジェニアスな要素の多い日本にいるより、環境の異なる場で生活すると一層、実感されて来ると思われたのである。

パークレーを引き揚げる時

外国にいと、本国からの手紙は殊に嬉しい。メールボックスを日に二、三度は覗いた。そこが唯一の日本への窓口であるから。母はよく小包を送ってくれた。ある時、母の郷里の四国からの薄く切った乾し芋が届いた。それは黒砂糖で味が付けられていて、幼い頃からの私の好物である。私は、アイ・ハウスの部屋で一人、それを噛み締めながら、母のこと、家族のこと、日本のことを想った。また長女(当時七歳)が、学校で書いた作文を送ってきた。私の夢はお父さんと、一緒にお風呂に入り、一緒に食事をするこ

です。こんなことは、通常なら夢などではなく、極めて日常的な事柄である。そんなことが、子供の夢となっている。そして私にとっても。もうアメリカに来て一年半以上がたっていた。やはり二年が潮時であると思いはじめた。だが、帰る直前になると(丁度、その頃、植村直巳氏が真冬のマッキンレーに消えたニュースが報じられていた)、四月初めまでは居ることが出来る。一週間でも、二週間でも長くいると仕事の整理はつくし、何よりもアメリカが肌で感じられるようになっていたから少しでも長くいると効果が上がる。再び来るにしても、何年か先のことである。その思いと、一方、私は、自坊の春の彼岸のことを忘れる訳には行かなかった。長らく寺のことは親父に任せっきりであった。それで私はアメリカに居ることが出来たのであるが。せめて今春の彼岸くらいは手伝わないと、その思いからぎりぎりまでいて、三月二十日に帰国した。その後、二年以上が経過した今、まだ再びアメリカを訪ねてはいない。当時の記憶はおぼろげになるようであり、また、逆に極めて鮮明に蘇って来ることがある。仕事のノートを広げるとバークレーでの日付が打ってある。その仕事は、まだ完了していな

い。その意味で、私の留学はまだ終わっていない。今、カリフォルニアを訪ねても、何も変わっていないことだろう。あのどこまでも青い空、町並み、山波。別れの時のランキヤスター教授の言葉を思い出す。私、また来ていいですか。教授、At any time いつでもどうぞ。カリフォルニアとは、そういうところだ。自由さの溢れたような土地柄である故、逆に言えば、強靱な意志力と方針がない限り(自分の思想がなければ)長くいても、単に自由をエンジョイするだけに終わりそうな恐い所でもある(西ドイツから来ていた友人も同じことを言った)。気候は、明るい太陽が照り付けドライである。歴史と伝統の浅い国故か、自己の確信がばやけてくると、心までが乾いてくる。しかしながら、カリフォルニアに限らずアメリカは、だれでも迎え入れてくれそうなそんな空気がある。元はといえば、アメリカ人自身が、夢を託して大西洋を渡り、西部へ西部へと夢を拡げた。また19世紀以降、現在も、各国から多くの移民や難民(キューバ・ベトナム・ラオス等から)を受け入れ、いかにアメリカ帝国主義の悪が取り沙汰されようとも、彼らもまた夢を託してアメリカへ渡った。そういう意味での希望と夢

のランドなのである。しかし、そこはユートピアではない。その夢の建設は、あくまで各個人の責任であることをより強く意識させるのも、このアメリカの特徴といえれば特徴であろうか。

今、ニカラグアではさらに戦火が激化しような情勢である。反政府軍を支援するアメリカは、そこにベトナム戦争当時の司令官と戦闘機を再起用したという。日本では、平和を満喫しているようであるが、世界の情勢は、常に厳しく、どこかで戦火が立ち上っており、絶えることを知らない。

最後に、ドナルド・キーン氏の言葉を引用して、結びに代えたい。「私の定義する真の国際人とは、他国の人々を理解し、そのうえで自国の長所短所も見極め、究極的には世界じゅうが人類にとって住みやすい場所となるよう、自分なりに努力しようという目的意識を持っている人のことなのである。」

へ一九八六年七月、梅雨明けの頃(もりやま せいいてつ 文学部専任講師)